

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：12401  
 研究種目：若手研究  
 研究期間：2019～2021  
 課題番号：19K13439  
 研究課題名（和文）先進国農村の反グローバル化運動とオルタナティブ農業の展開に関する研究

研究課題名（英文）Study of anti-globalization movement and alternative agriculture in developed countries

研究代表者  
 市川 康夫（Ichikawa, Yasuo）  
 埼玉大学・人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：60728244  
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、先進国農村の反グローバル化運動とオルタナティブ農業の展開について、オルタナティブ農業の山村での実践についての研究成果のほか、コミュン運動に関する論文の研究成果を得た。いずれも、代替社会への実現について、資本主義や大量生産を批判し、エコロジーの観点から生活を基礎に実践する人々の営みを明らかにした。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、共同体運動については1970年代に研究が蓄積されたものの、その後運動の高まりに比して多くの研究がなされてきたとは言いがたい。一方で、インテンショナルコミュニティ研究には一定の蓄積があるが、通史的に現代までの流れを社会科学の視点から整理した論考は必ずしも多くなく、フランスを事例に農村という空間の意味やその価値変容を軸に本研究が明らかにした事実は、今日増加している共同体運動による様々なエコロジカル集団の背景の解明において一つの視点と共有されうる学術的情報の提供に貢献したと言える。

研究成果の概要（英文）：This study on the anti-globalization movement and the development of alternative agriculture in developed rural villages yielded research results on the mountain village practice of alternative agriculture, as well as research results from a paper on the commune movement. All of them revealed the activities of people who criticize capitalism and mass production and practice them on the basis of their livelihoods from the perspective of ecology with regard to the realization of an alternative society.

研究分野：人文地理学

キーワード：共同体運動 カウンターカルチャー ヒッピー エコロジー アナキズム フランス 理想郷 コミュニオン運動

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

世界的な貿易自由化と新自由主義経済化の影響により先進国の農業・農村を取り巻く環境は大きく変容している。とりわけ、グローバル化が加速した 1990 年代以降は、アメリカや BRICS、ケアンズグループによる大量生産を基礎とするフォードイズム農業が世界に展開し、ネオリベラルな貿易自由化が進展してきた。一方、これに対抗してきたのが日本やヨーロッパなどの経営規模の小さな農業国家群であり、彼らは大量生産国に対抗する新たなオルタナティブとして、農業保護の削減が義務である国際貿易ルールに抵触しない「農業の多面的機能 (Multi-Functional Agriculture)」という概念を政治的に生み出し、グローバルな社会正義を盾にした農業・農村のポリティクスを構築してきた。これは、「埋め込まれたネオリベラリズム」あるいは「グリーンネオリベラリズム」と呼ばれ、自国の農業を保護するために「環境」を戦略的に位置付ける 21 世紀の新たな農政として世界に広まっている。しかし、これに対して批判的な研究をするものはこれまで少なかった。

こうした先進諸国における新自由主義的でグローバルな農業政治と支配は様々な矛盾を表出させており、この政治に対する異議申し立てが、先進国と途上国、輸出国と輸入国、生産者と消費者の違いを超えて世界中で高まっている。とりわけヨーロッパは農業・農村の反グローバル運動の中心地であり、例えばフランスを中心とするアルテルモンディアリズム運動や、イタリアで始まり世界へと拡大した「スローフード運動」、活動家ジョゼ・ボヴェに代表されるグローバルな食に対する過激な反対運動などである。

これら反グローバル化運動において必ず強調されるのが「ローカル(local)」あるいは「ロカリティ：地域性(locality)」の問題である。しかし、既存の研究において、反グローバル化運動は、農村といったロカリティ/ローカルの文脈、そしてグローバルの文脈とが切り離されて論じられてきた。そのため、まず反グローバル化運動を、両者の文脈から分析する視点が必要である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ヨーロッパ先進国で進展する農村における反グローバル化運動とオルタナティブ農業の展開について、その中心的な存在であるフランスを研究対象に、グローバリティ(globality)と地域性(locality)の文脈の視点から明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

本研究では、グローバリティ(globality)を「成熟したグローバル社会の状態」と

して定義し、ロカリティとの相互関係をオルタナティブ農業と農村の抵抗/再発見の具体的な事例・実践に注目することで課題解決に取り組む。とりわけ、グローバリティの文脈では、これまで単に「グローバル化」としてひとまとめにされがちであったその文脈を、多様な行為主体の動態とその背景にある新自由主義貿易、多面的機能レジームといった要素から農業・農村における政治的文脈を整理することにまず取り組む。そしてこれらを踏まえ、具体的な事例の分析を行う。その際は、地域性においてはローカルが強調される地域ガバナンス、都市・農村関係、「大地に帰れ」運動などの要素に注目して、事例の普遍性を考えていく。

#### 4. 研究の成果

##### (1) 「大地に帰れ運動」とカウンターカルチャーとしての共同体

農村への帰還運動は、都市の資本主義や貨幣経済の否定、田園主義や反工業主義など、様々なユートピアを原動力に展開してきた。その最初の波は19世紀末～20世紀初頭にあり、産業革命後の急激な都市発展に伴う環境悪化や社会不安、経済不況を背景にアメリカやヨーロッパで起こった。都市化や工業化の進展は、その反動として田舎や田園へのロマンティックな憧れを生み出し、農村を「美しく健康的な場所」として理想化させてきた。素朴な農業生活に美德を求め農村へと向かった人々の動きは、「大地に帰れ運動」の原形でもあるが、ごく一部の実験的な共同体に限られていた。

農村への帰還運動が、広く社会へと拡大するようになったのは、1960年代末の社会運動を源流とするコムニオン運動が発端である。1968年の学生を中心とする大規模な左翼運動は、国家の支配や伝統的な価値観に異議を唱える国を超えた社会運動となり、「主流文化（メインカルチャー）」に対抗する様々な「対抗文化（カウンターカルチャー）」を生み出した。コムニオン運動は、このカウンターカルチャーの一部として、アメリカのヒッピー文化の影響を受けながら、資本主義や消費社会、国家の管理、ブルジョア的慣習を批判し対抗するために、自給自足に基づいたユートピアを目指して展開した。この1960年代末の社会運動を契機に若者が農村へと向かった現象は、欧米圏では「大地に帰れ運動」と呼ばれている。しかし、その説明に厳格な定義はなく、1970年代以降からみられたより幅広い農村移住を指す場合や、「自然に帰れ運動」と呼称される場合もある。

本研究では、「大地に帰れ運動」を北側先進国で広くみられた農村への帰還運動として捉え、その定義を「社会批判を伴うカウンターカルチャーとしての農村への帰還運動」として研究を進めた。カウンターカルチャーに限定する理由は、現代のコムニオンやエコロジカルな共同体の源流がカウンターカルチャーとしてのコムニオン運動にあり、ま

たこうした現代の共同体の理念は主流社会への批判や代替社会の実現にあるためである。

## (2) コミューン運動にみるフランス農村のユートピア

本研究では、「大地に帰れ運動」は、1968年を契機として、都市や資本主義社会への批判や決別を目標に、1970年代と2000年代以降という「2つの波」を形成してきたことを明らかにした。第1の波では、共同体運動によって、戦後消費社会の都市生活よりも簡素で真正性を有する場所として農村が理想化され、その理想は農村ユートピアの大衆化、エコロジー運動の高まりを通じて、次第に社会へと共有化されていった。他方、1980年代のエコロジーの政治化によって行き先を失った共同体運動は、一時期衰退の時期を迎える。しかし、1990年代のグローバリゼーションという新たな覇権への危機感によって共同体運動は第2の波として再生し、コミューンやエコヴィレッジを媒介に、理想郷としての農村からエコロジーの実践地へとその意義を拡大させていった。

共同体運動の考察から得られた知見を、「2つの波」の比較からまとめると、共同体の人々は、左翼運動から派生した都市中産階級の若者であったものが、現代ではエコロジーやパーマカルチャーの関心者へと変化し、特に専門性や技術を活かした人々が共同体の住人となった。また、かつて流動的であった構成員は現代では固定化し、組織の地域定着化も進んでいる。参加者の年齢は、20～30代の若年者から中高年や子育て世代を含めた幅広い層に広がり、新たな連帯を通じたエコロジーが広い世代に共有されるようになった。共同体の立地は、山村や過疎地から都市郊外やアクセスの良い農村へと移動し、閉鎖的であった共同体は、都市や社会に向けた開放的な存在へと変化した。また、共同体の生業は、自給的な農林業から付加価値の高い農業や加工品の製造、エコ建築、滞在受入れとなり、都市の消費者や観光需要を意識したものとなった。加えて、脆弱なインフラと廃墟修復を特徴としていたかつての住居は、テクノロジーや知識を活用し、個室を備えたエコ建築へと置き換わった。そして、組織理念は、古い共同体が掲げる菜食主義やスピリチュアル、アナキズムから、現代ではパーマカルチャー、オルタナティブといった言葉が採用され、エコロジーの実践手段として農村と共同体が位置づけられるようになった。

## (3) まとめ

「大地に帰れ運動」における農村という空間は、価値の再定義を行う「実験の場」として機能してきたことが明らかとなった。それは、貨幣や労働、家族観や人生などの価値を、共同体という社会実験から問い直す過程でもあった。そのなかで、農村は、個人

を解放する「逃避の場」から、「エコロジーの実践と社会共有の場」へとその意味を変化させてきた。カウンターカルチャーとしてのコミュン・共同体の背景には、常に批判対象としての主流社会の存在があり、社会批判へのエネルギーが彼らの存在を支えてきたといえる。また、都市というアンチテーゼに対する農村は「大地に帰れ運動」にとって重要な命題であり、「都市の否定的イメージ」と「理想郷としての農村」の対比が強く意識されていた。その背景には、農村の真正性や、大地や自然を有する農村に価値を見出す大地に帰る人々の存在があった。「大地に帰れ運動」においては、社会への批判とエコロジーの実践へのプロセスのなかから新たな価値が生み出され、かつ消費されてきたと結論づけられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>市川康夫  | 4. 巻<br>128           |
| 2. 論文標題<br>中山道を歩くインバウンド・ツーリズム-欧米系ツアーリストの来訪動機に着目して     | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>地学雑誌  | 6. 最初と最後の頁<br>921-940 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.5026/jgeography.128.921 | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                 | 国際共著<br>-             |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>市川 康夫, 中川 秀一, 小川 G. フロランス                         | 4. 巻<br>14            |
| 2. 論文標題<br>フランス・ジュラ農村にみる移住者の増加と田園生活 フランシュ・コンテ地域圏, カンティニ村の事例 | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>E-journal geo                                     | 6. 最初と最後の頁<br>258-270 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.4157/ejgeo.14.258             | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                       | 国際共著<br>該当する          |

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>市川康夫  | 4. 巻<br>67          |
| 2. 論文標題<br>「大地に帰れ運動」にみるフランス農村のユートピア コミューンの理想郷からエコロジーの実践地へ | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>経済地理学年報   | 6. 最初と最後の頁<br>23-42 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                             | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                    | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>市川康夫                                 |
| 2. 発表標題<br>フランスにおける農村移住の展開-郊外農村の生活と山村のオルタナティブ農業 |
| 3. 学会等名<br>日本地理学会                               |
| 4. 発表年<br>2020年                                 |

〔図書〕 計1件

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>市川康夫                                 | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>勁草書房                                 | 5. 総ページ数<br>280 |
| 3. 書名<br>多機能化する農村のジレンマーポスト生産主義後に見るフランス山村変容の地理学 |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|